

子どもの自主性としつけに関する調査研究

碓 井 岑 夫

(1981年10月15日 受理)

Independency and Discipline: Research on Independency in Child Development

Mineo USUI

研究の課題

子どもの自主性は、自然発生的に形成されるものではないだろう。ヒトという種の子どもは、それ自身が成長・発達する内在的な力を持ち、その主体的なエネルギーが社会・自然環境との交流によって人間的存在へと結実してゆく。こうした成長・発達の可能性と諸環境とのかかわりは複雑で、多くの要因が複合的に関係しあっていると考えねばならない。したがって子どもの自主性の形成過程や構造もまた単純なものではない。

人間の「子育て」はひとつの意図的な働きかけの体系である。子どもの成長・発達の可能性が社会・自然環境と交流しうるように条件を整えたり、意図的に働きかける諸活動が「子育て」にほかならない。それゆえ、子どもの自主性は家庭・学校・地域社会などの教育的働きかけと、ひとりひとりの子どもの可能性との交流を通して形成されるのである。言うまでもなく、同じ条件の教育的働きかけでさえ、それが個々の子どもに及ぼす影響力は異っている。まして、「自主性」という子どもの人格発達の内面にかかわる能力と教育的働きかけとの関係は複雑である。

われわれは「自主性」を次のように仮説的に定義した。『「自主性」には、すくなくとも、自分で自分の主人公であるという意識が育っていることと、自分の意志で自分の行為を決定し行なう力が養われていること—それを『自主性』ということにする—と、自主性を支える行動機制の形成、つまり習慣化され内化された生活・行為規範の確立、の2つが必要であろう。この自立化をうながし、のぞましい自立化の内容をつくる働きかけが『しつけ』である』¹⁾。このような仮説にもとづいて、今日の子どもの自主性の実態を明きらかにすることを目標として調査を行い、その結果の概要は『鹿児島の子どもと親の生活と意識調査報告書(第1次)』(以下第1次報告書と略称)にまとめた。

本稿では、仮説的に述べた自主性を構成している「習慣化され内化された生活・行為規範の確立」の実態と自主性の実態とがどのような関係にあるか、つまり、われわれの仮説を1側面から検証することを課題とする。両者の間に高い相関関係があるとすれば、子どもの「自立化」として生活習慣・生活規律の形成のための働きかけ(多くは「しつけ」と考えられる)が重要な意味をもつことになるだろう。

研究の方法

調査の方法の詳細は第1次報告書にゆずり、ここでは本稿の論述に心要なかぎりの基本的データのみを示す。調査は「子どもの自立」の実態とそれに関係していると思われる「基本的生活習慣」・「しつけ」・「親子関係」などとの相関をさぐることを目的として、1980年5月～6月、小5・中1・中3の児童生徒とその母親を対象にアンケート調査を実施した。調査の標本の構成を表-1に示す。

われわれは、調査対象者の年齢を考慮して自主性の内容を次の4要因でとらえようとした。すなわち、(1)計画性—物ごとに見とおしをもってあたり計画的に行動する (2)自己主張—自己の主体的な認識や考えをもち、それを論理的に主張する (3)自己統制—一時的な感情や自己中心的な考えを抑えて、関係的な認識ができる。(4)責任感—集団のなかで自己の役割を自覚し、民主的な集団の発展のために責任ある行動がとれることである。質問内容は、計画性3問、自己主張2問、自己統制3問、責任感2問の計10問であり、石川勤・藤原喜悦共著『DTI-Diagnostic Test of Independence』(金子書房)を参考にして作成した。

C-22 あなたは、おこづかいを計画をたててつかいますか。〔計画性(2)〕

C-23 毎月のおこづかいで買えない高い値段のものがほしいとき計画的につみたてますか。

C-24 あなたは、勉強の計画を自分でたてて実行していますか。〔計画性(1)〕

C-25 あなたは、自分が正しいと思えば、仲良しの友だちとでも、いいあうことがありますか。〔自己主張〕

C-26 あなたは、いやなことはいやと、はっきり自分の気持がいえますか。

C-27 あなたは、テレビの見たい番組があると、テレビを見てしまい、予定していた計画をか

表-1 地区別・性別・学年別構成

地 区	商 業 地 区		旧 住 宅 地		新 興 住 宅		近 郊 農 村		合 計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
小5	97	78	93	99	102	82	98	87	390	346
小計	175		192		184		185		736	
中1	104	116	107	89	98	96	104	101	413	402
小計	220		196		194		205		815	
中3	89	90	114	111	94	100	102	100	399	401
小計	179		225		194		202		800	
地区合計	574		613		572		592		2,351	
%	24.4		26.1		24.3		25.2			
男・女計	290	284	314	299	294	278	304	288	1,202	1,149
%	51.1		48.9							

学年 % 小5 31.3 中1 34.7 中3 34.0

えたり宿題などやれなかったことがよくありますか。〔自己統制(5)〕

C-28 あなたは、自分がやりたいと思っても、人にめいわくになるようなことは、じっとがまんすることができますか。〔自己統制(4)〕

C-29 あなたは、きれいなものでも、からだのためになるものは、がまんして食べますか。

C-30 あなたは、友だちと約束したことは、きちんと守りますか。

C-31 あなたは、学級や係やクラブ（部活動）のしごとをひきうけたとき、せいっぱいがんばりますか。〔社会的責任〕

表-2 「自主性」各群の構成

	小 5		中 3	
	I	II	I	II
計画性(1)	266	213	162	274
計画性(2)	359	174	350	132
自己主張	510	87	510	37
自己統制(4)	394	103	341	51
自己統制(5)	261	309	102	450
社会的責任	545	21	399	41

本稿は、「自主性」の調査項目のうちから、計画性(1)、計画性(2)、自己主張、自己統制(4)、自己統制(5)、社会的責任の項目の、それぞれ自主性の高いグループ I 群、自主性の低いグループ II 群に分類して、両グループの子どもの生活習慣・生活規律の実態をクロス分析し、前述の課題を検証しようとする。

各グループ群の構成は表-2 に示すが、分析過程では各項目を統合・分化して操作することができる。

自主性と子どもの生活リズム

「自主性」に関する I 群と II 群は、「生活リズム」についてどのような特徴をもっているのだろうか。

1日の生活の始まりである「起床」の状態は、その生活リズムの形成のうえで重要な位置をしめている。自主性と「起床」との関係を見てゆこう。前述の自主性要因4項目のうちA評価が3個以上を「総合評価A」とし、C評価が3個以上を「総合評価C」として、残りを「総合評価B」とした。その結果、総評Aは自主性の高いもの、総評Bは自主性中程度のもの、総評Cは自主性の低いものと考えることができる。

図-1 は、自主性総合的評価と「起床」との関係を示したものである。全体的な傾向としては、A群とB群の間に差がある。すなわち、「ひとりで起きる」子どもは、小5で約15%、中で約7%の差があり、逆に朝の目覚めが悪く「だれかに起こ

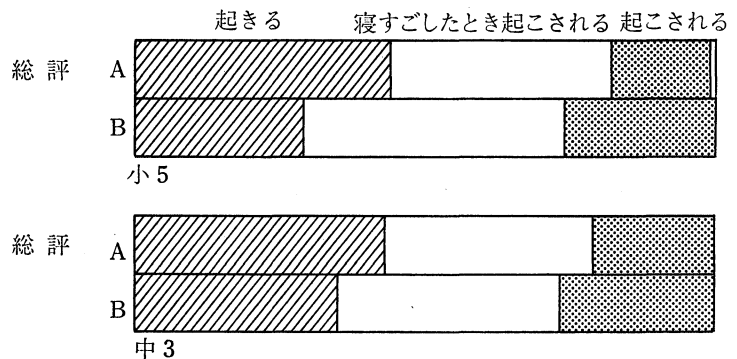


図-1 自主性と起床

表—3 「自主性」要因と起床

(%)

		計 画 性 (1)		自 己 主 張		自 己 統 制 (4)		社 会 的 責 任	
		I	II	I	II	I	II	I	II
ひとりで起きる	小5	41	25	33	45	35	27	35	24
	中3	40	39	38	43	38	35	37	46
寝すごしたとき 起こされる	小5	40	44	42	37	44	43	43	43
	中3	30	37	37	43	37	35	36	29
起こされる	小5	20	30	25	14	21	30	22	29
	中3	30	24	26	14	24	29	26	24

される」子どもは、小5で約9%、中3で約3%の差がある。小5よりも中3で差が接近するのは、彼らの自覚の生まれたことによるのであろうか。第1次報告書は、「就寝時刻は、同地区、同学年でもかなりちがいがあがあるが、全体的に%のもつとも多い時刻を見ると、小5は9~10時、中1は10~11時、中3は11~12時とほぼ1時間ずつ遅くなっている²⁾」と述べており、小5と中3の生活時間、睡眠時間の相違を考えると、注目すべき傾向である。

自主性の各要因と「起床」との関係を示したものが表—3である。自主性総評では、起床との相関関係が見られたが、自主性の各項目毎に検討すると若干の特徴が見られる。

小5から中3への変化を見ると、「計画性(1)」を除いて、「ひとりで起きる」がI群ではわずかに増加しているのに対して、II群では約10%近い増加が見られる。とくに、「自己主張」や「社会的責任」において自主性の低いII群が、「起床」で望ましい態度をとるのは、中3では生活リズムと「自主性」に関する態度・心性とがある程度切り離されていることを表わしていよう。また、「起こされる」の数値の変化を見ると、II群では減少ないし不変化であるのに対して、I群では漸増している。「計画性(1)」は20%→30%、「社会的責任」は22%→26%と増えており、これも上記の傾向を示している。

「自己主張」「社会的責任」のII群で変化が大きいのは、そうした領域での自主性の低い方が生活リズムを形成していると解釈すべきではない。第1次報告書が言及しているように、「『社会的責任』は、全体として年令の上昇とともに低下する」のであり、とくに中3では「どちらともいえない」という態度保留・未定が増加し、その結果肯定回答が相対的に減少しているために、「ひとりで起きる」のが増加したと考えられる。

「計画性(1)」のI群は、「起こされる」が10%も増加する。これは彼らの勉強時間・睡眠時間との関係があるのであろう。後述するように「計画性」の高い子どもは勉強時間が長く(表—11参照)、したがって就寝時間が遅いため、朝自分で目覚めることが少ないのであろう。とくに、中1を境目にして勉強への取りくみの姿勢が分化し、受験勉強の追いこまれる中3の多くの生徒の生活スタイルは、彼らの自主性と関係の少ない勉強時間・就寝時間を余儀なくされたものとなる。「起こされる」が「自己統制(4)」以外の要因でI群が高いのは、こうした受験勉強体制の結果と考えることができよう。

「起床」「洗顔」「朝食」「排便」「寝具のかたづけ」の5項目の設問のうち、望ましい回答が3問以上あるものをA、望ましくない回答が3問以上のものをC、残りをBに3分類して生活リズム全体の評価（総合的評価）との関係を考察してみよう。

生活リズムを学年変化で見ると、項目の特徴を3つのタイプに分けることができよう。すなわち、「起床」「排便」の不変低位型、「洗顔」

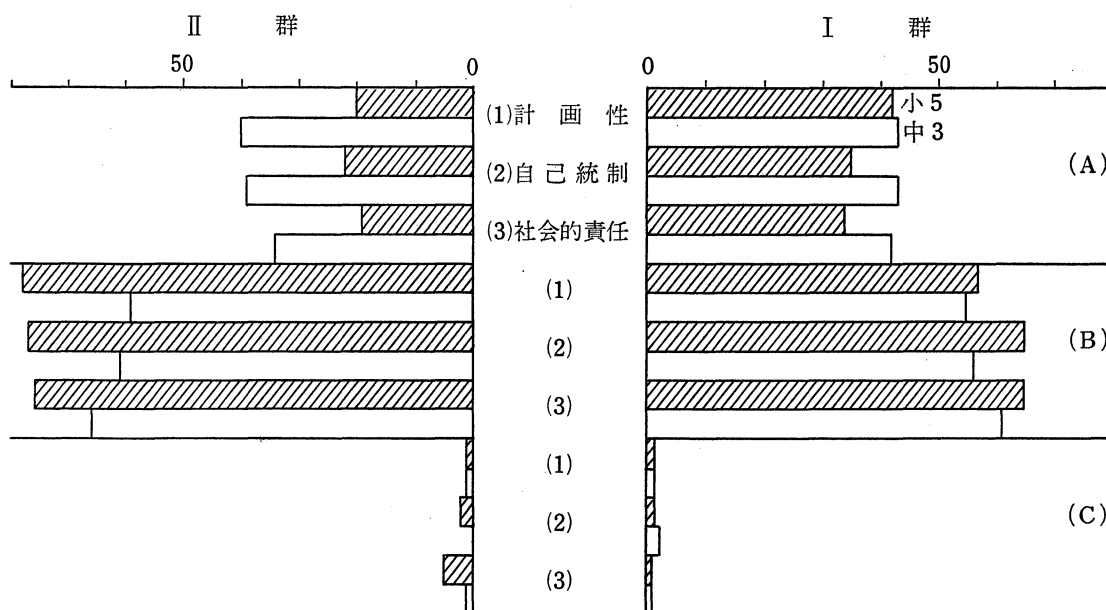
表一4 生活習慣と「自主性」(I)

		計画性(1)		自己統制(4)		社会的責任	
		I	II	I	II	I	II
A	小5	42	20	35	22	34	19
	中3	44	40	43	39	42	34
B	小5	57	78	65	77	65	76
	中3	55	59	56	61	56	66
C	小5	1	1	1	1	1	5
	中3	1	1	2	0	1	0

「寝具のかたづけ」の上昇型、「朝食」不変高位型である。不変低位型は約30%前後を中心にして各学年変化が少なく、上昇型は学年進行とともに10~20%の上昇変化が見られる。それに対して、「朝食」の不変高位型は75~80%の間ではほぼ変化はないが、「朝食を毎日食べない」子どもが20~25%もいること自体が問題である。

図一2は、表一4を図表化したものである。生活リズムと自主性との関係は、全体的に見れば小5ではI群とII群の差は大きく、中3になると、その差は小さくなる。

生活リズムが形成されているAグループを見ると、小5では約15~20%の差があり、自主性の高低は生活リズムの形成と相関していると考えられる。ところが、中3になると両者の関係は小さくなっていく。そのなかで、「計画性」「自己統制」に比較して「社会的責任」の項目で8%の差があるのはなぜだろうか。第1次報告書の次の指摘が示唆的である。「『社会的責任』は、全体として年令の上昇とともに低下する。小5で男女とも70~80%の高率を示しているが、中3になると『旧』『農』の女子を除いて50%に下落する。とくに『農』男子は35%をわっている。この傾向



図一2 生活リズムと自主性 (2)

は、(C-30)の回答と逆の形をとっている。中3では、私的な約束を守る責任感はあるが社会的な責任感は乏しいといえよう³⁾。

とくに、生活リズムBグループを見ると、小5でもI・II群の差は小さくともあるが、中3になると全ての領域でII群はI群をこえる。中3ではAグループが「計画性」→「自己統制」→「社会的責任」へと漸減するのに対し、Bグループは全く逆の傾向にあり、自主性は低く生活リズムも中程度の子供が多いといえる。

表-5は、生活リズムIの「A」「B」の差を出したものである。自主性が低いII群では小5と中3に1つの特徴がある。小5では55~58%の差に対して、中3では19~32%の差であり、II群でも生活リズムが形成されていることが明らかである。しかし、「朝、自分ひとりで起きられる子どもが少ない。(中3で1/3強)⁴⁾」という問題指摘のある通り、I群とII群の差は小さくなくても、「起床」に関して2/3の中3は問題があるといえよう。表-6は、中3の「起床」と「自主性総評」との関係を示したものであるが、絶対数は少ないが「自主性総評」Cグループも「起床」に関

表-5 「生活リズムI」B-Aの差

	計画性(1)		自己統制(4)		社会的責任	
	I	II	I	II	I	II
小 5	15	58	30	55	31	57
中 3	11	19	13	21	14	32

してはAグループよりも望ましい傾向にあり、この意味からも「自主性」と「起床」の関係は前述のような原因から中3でくずれてきている。

自主性と子どもの生活規律

自主性と生活規律との関係はどうなっているだろうか。生活規律に関する設問のうち、「勉強時間をきめている」「食事中にテレビを見ない」の2項目を取り出し、I・II群との関係をみる。

表-7は、自主性のうち「自己統制(4)」と生活規律2項目との関係を表わしたものである。

一般に、食事中にテレビを見ていると、食事内容への関心がうすれたり、咀嚼がおろそかになる

表-7 自主性と生活規律

		I 群		II 群	
		小 5	中 3	小 5	中 3
「食事中のテレビ」	見 ない	26%	16%	19%	22%
	見 る	27	43	37	53
「勉強時間」	きめている	35	31	17	18
	きめていない	44	38	63	57

表-6 「起床」と「自主性総評」(中3)

自主性総評	A	B	C
起 き る	39 42.4%	247 350.0%	3 60.0%
寝すごしたとき起こされる	33 35.9	270 38.2	24 40.0
起こされる	20 21.7	188 26.6	0 0.0

ことが指摘されている。同時に、生活規律を形成するうえでも望ましいことではない。また、勉強時間をきめているかどうかも子どもの生活規律のうえで重要な要素となろう。

概括的に言えば、小5ではI群とII群との間に明確な相違があるが、中3ではそれが若干くずれている。つまり、小5では、「見ない」が7%、「見る」が10%の差によって、I群が優位であるが、中3では、「見ない」は-6%、「見る」は10%となり、「見ない」はI群よりもII群の方が高い結果を示している。しかし、これは設問の特殊性による結果と考えられる。後述する「テレビの視聴時間」の中3的特徴を考えあわせると、「食事中にテレビを見る」ほかテレビを見る時間がないほどに彼らの生活は受験勉強に追いこまれていると考えざるをえない。

次に、現代の子どもの「テレビ視聴時間」と自主性との関係を見てゆこう。

図-3は、子どもの平日の「テレビ視聴時間」を地域別に見たものである。第1次報告書は次のように述べている。「1977年のNHK調査によれば、平日のテレビの平均視聴時間は、小学生2時間14分、中学生1時間55分、家庭婦人4時間33分、国民の平均では3時間15分である。では今回の調査では鹿児島島の状況はどうであろうか。(中略)この調査によれば、テレビ視聴時間は、全体の傾向では学年がすすむにつれて減少する。(中略)地域的に長時間視聴の子どもが多いのは、「農」と「商」であり、性別では男子が女子よりも多い。3時間以上の視聴は「農」、「商」では中3男子で20%を超える。小5の長時間視聴はそれほど地域差が大きいがないが、中3では地域差はきわめて大きい。」⁹⁾

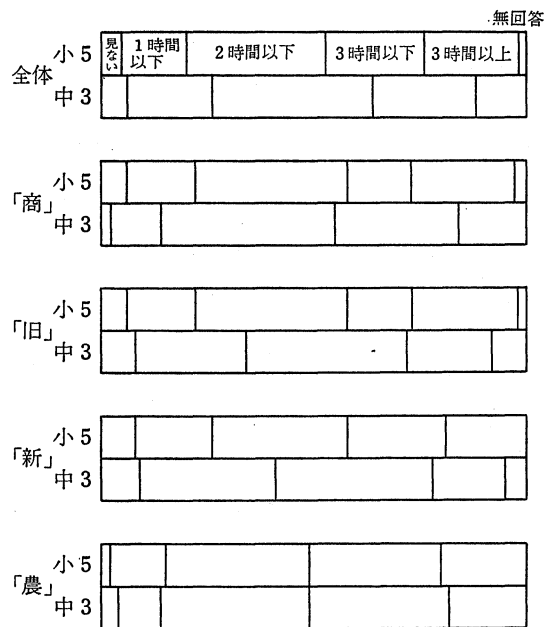


図-3 1日のテレビ視聴時間

学年が進むにつれて「テレビ離れ」が自然におこるのではない。中3の子どもたちの意識的・主体的なテレビ離れではなく、クラブ活動・受験勉強などの他律的な力によって「見たいテレビ番組

表-8 自主性とテレビ視聴時間

		計画性(1)		計画性(2)		自己主張		自己統制(4)		自己統制(5)		社会的責任	
		小5	中3	小5	中3	小5	中3	小5	中3	小5	中3	小5	中3
I群	1時間以下	22	27	15	23	15	21	17	22	25	30	17	20
	3時間以上	17	4	18	8	22	11	17	9	15	3	20	9
II群	1時間以下	9	15	12	13	10	24	13	22	7	17	10	32
	3時間以上	29	18	27	17	30	14	32	16	28	14	48	15

注 「1時間以下」には「見ない」を含まない。

